

とも歩む

39

滝脇 憲

よ「こ」に「す」
人レで
6リム
*るラ

人生の最期を、自宅で迎える人が増えているという。東京都東部の山谷地域で、多くの単身高齢者を支援する私たち「ふるさとの会」にとっても、「看取り」は重要な問題だ。

先日、私たちが運営するカフェで「泊まり会」が行われた。重い認知症の80歳代の利用者・Wさんと、仲間や職員計14人が集まり、買い出しをし、ラーメンを食べ、同じ空間で寝た。

Wさんは、しばらく前から昼夜構わず怒声をあげるようになっていた。その夜も、「あ〜」と叫んだり、大声で独り言を言ったりしていたが、誰も何も言わなかった。Wさんと同じホームに住むNさんに聞くと、「彼の不安な気持ちはみんな知っている。文句を言つ人はいないよ」。皆、Wさんの不安を和らげたい一心で、会に参加したのだ。Wさんにとっては、古い仲間と会い、涙あり感動ありの夜だった。

在宅の看取りでは、皆が集いやすい居間や仏間に寝床を作り、一緒に過ごすことが多いという。お金のない単身者の場合、自宅の代わりに皆が一緒に過ごせる場があり、そこで医療や介護を受けられれば安心だ。それには、Wさんのような気持ちを共有し、助け合える仲間がいることが前提だ。

互助の関係を作り、支えるのは我々職員の役割だ。大切なのは、看取りの場所よりも、本人の安心のために皆で支えていこうというプロセスかもしれない。

43歳。NPO法人「自立支援センタール」理事。